

## 太古へ降下する

牧師 山本 護

物置小屋の前の地面に奇妙なストーンサークルがあった。少年 S くんが蛾の蛹を集め、それを石で囲ったいわば墓碑なのですが、こりゃ心性の深い所で人類に通底している太古のヴィジョンじゃないのか、という大げさな予感がありました。



礼拝堂の正面窓外に建てられた円環十字架は、石に彫られたアイルランドの古いハイクロスを手本にしています。そのケルト的象徴のさらなる底部には渦巻き文様

で知られる石器時代があり、この深度では信仰の原像も民族や歴史を横断している。そんな信仰の原像が少年の無意識からふいに表出し、蛹を祀る円形の聖域がつけられたのならおもしろい、と印象深く見つめました。

少年がつくった蛹の墓碑は、英国南部に遺るストーンヘンジやブルターニュの列石遺跡などと相似形。こうした遺跡群は紀元前 3500～2500 頃に造られ、巨石の配置は太陽や月の運行を綿密に観察したもので、太古の宗教聖所であったとされています。

J.ホイジンガー(1872～1945)は、儀式と遊びを連関させ、それらを通して「自分を超越る絶対者に近づく」と唱えました(『ホモ・ルーデンス/遊ぶ人』)。眩暈を伴う神秘的な遊び「かごめかごめ」をしたのは私が幼児の頃ですが、想像を膨らませるとこの小さなストーンサークルは、かごめかごめで降下した無意識のスティグマ(聖痕)のような気がします。

祝福してもらおうと子供らを連れて来た親を弟子たちが咎め、そんな弟子たちをイエスが咎めました(マルコ 10:13～14)。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである(10:14)」。

このような者、とはどういう者でしょうか。通常は、庇護を必要とする力なき者、神の助けなしには生きられない者、とかそのように解されます。それだけではなく、遊びに没我できる「混沌たる無垢」を加えてもいいのではないかと。つまり子供は、民族や歴史を超えた、宗教文化や神話よりも深い領域に易々と降下できる魂を有している。そう思い描くとイエスが発する言葉の色調も変わってきます。

「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない(10:15)」。礼拝という儀式を献じて、私たちは「神の国を受け入れよう」と祈ります。それでは、遊びではどうでしょうか。世間に適応した自我を脅かす太古からの無意識を恐れず、子供のように遊びながら深くまで降下してみたい、とただアーメン「両三篇申してやみぬ(方丈記の結び)」。Ω